

にしき  
でん  
号



NO. 139

3

尋二

雨

石津篤夫

この二三日の雨で風も なみも きれいに なぎました。  
ぼくは、雨ばかりふって おてんきに ならずいあそべ  
ないので こまっておましたら、 今日きれいに はれた  
ので、ぼくは うれしくて たまりませんので、今日は  
あちき つりに行くつもりです。  
おれは行きますせん

私のうち

浅沼

俊

私のうちは なごやです。私のうちには せんせいも  
います。こどもも四人おます。私のうちは  
おとうさんおななさんおます。みんな七人です。

ふんが はいつてくると おうちも いそがしく  
おほせい人がきます。  
うちは いそがしいときには いそがしくてたまりません。

きのふ

浅沼

誠

ぼくは、きのふ ひがしまちについて ひかうきを かひ  
ました。そうして、ごむで とばして あそびました。  
すきと まだ 四うぐらいのこが ひかうきを かつて お  
くれといったから、ぼくは ひかうきを おいて かつて来て  
やりました。そうして 又 とばして あそびました。  
そこへ 又 とまだちが ひかうきを もつて とばしたら  
やねえは、しまったので、ぼくが やねへ上つて とつて やりま  
した。

尋三のつり方

すべりだい

毎田米

私は昨日すべりだいにのりました。  
女生の方がすべりしかすべら  
なくて、男生の方がすべりす  
べります。そして女生の方  
はつかへます。男生の方は  
すべりすとすべるから、下の方  
の板があるところにしりも  
ちをつきます。それから  
女生のは此の頃、よくすべ  
るやうになりましたので、こわ  
くて たまりません。

土屋せい子

私たちの學校にこんどす  
べりだいができたので、みん  
なが、大よろこびです。す  
べりだいには、いつ見ても大  
せい乗つておます。今日も  
朝来て見たら、大せい来て  
おてはしごだんは、おれを  
いくらおです。おれの子は、あ  
とから来て、すんく、先に行  
つて、女の子をあからせませ  
ん、だから、おれはいやです。



あらうて、はくをすましたらみるちやえ  
が通りかかったので、しよに學校へ行つた。

夕方に居るまで 沖山 茂子

私が學校から歸つて來て時計を見ら  
ると三時半だった。それから赤ん坊を  
おぶつてゐたら、ねたから一飛で行つたら  
もう四時でうちへはお湯をわかして  
おた。それから私がまきごとや、はたどり  
をして遊んでゐたらもう夕方にた  
ました。私はずたを歌ひながら家へ  
歸つてお湯に入る時、火の火をひを  
ました。

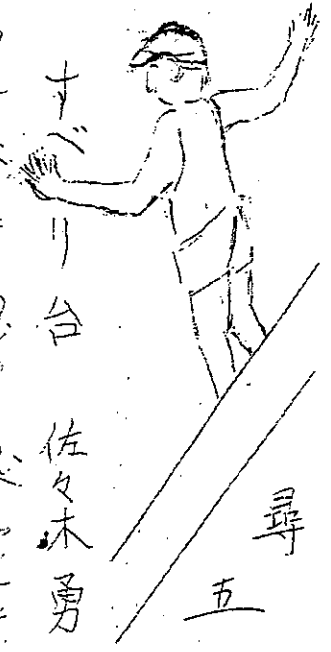
(なぞ大笑ひをした。）

うちのねこはちびどいひです。一番はトエ

ぬは孝行せんかむした。それから田尻之

へもりのせきをした。田尻之んが燈清へ  
引越すとよきお世行のためや家の木こた

だけはとでもよある。たます。けれども  
あかぼなど小こい魚のたまは食へませ  
まぐらよ。はうたなだのかわや肉を食へ  
ます。ねもすきです。ちびははりかすい  
たす。ななははは。任有なまうにたいて  
のまは。今食す。かむのからだは二色  
です。白と黒です。私はどうも。早くあで  
さへ。それば笑ひ顔ばかりです。このお  
に。お給をぬつて遊びました。しつはは  
長くない。おすみを。あなも。とも。上  
です。す。家からあかげかう。ちにはおす  
が居ます。おむはぬると。さ。に。は。は。は。  
た。と。え。な。ます。遊。と。き。には。は。は。は。ひ  
山へ行きます。



すうつとすべつたと思つたら、じやんとし  
りもちをついた。昨夜の事である。僕

は消防組が何か學校でして居ると  
いふ事を聞いて行つて見た。庭は

電燈がついて大変あかるい。ふとすべり  
台の方を見ると生徒が大勢すべつて

居る。僕等の級も居たりです。いそばに  
くつをぬいでおいてはしごたんを上つたつ

とと同じ調子にすべるだらうと思つて立

すべりをやつた。すると中頃かり急に勢

よくすべつて下にいつしりもちをついた。

それから又はしごたんを上つて、今度は坐つ

てすべつた。大変氣持がい。それから

も、の、実拾ひ 田中 茂子

私は學校でものを買上げるとき

と、そのあくる朝すぐ持つて來ました。

それから幾日かたつた或日のこと、ひどく風

が吹きました。學校からかへると家のい

ぬちやがたくさしく拾つておいてくれました。

私はいれりくて、ほんとに妹がある。ね

と、心の中、でふかく感じました。それから



居る時犬がわんわんと吠えたり胸がどくどくと  
 下すばかり石を持つて投げたりはうよく  
 だと思つたり同時にキヤリ／＼なう鳴け  
 ていた。私はほ／＼と息をとりてザン／＼と  
 歸りまゝだ。

秋の夜

小祝 温子

近頃は夜になると蚊と寒く／＼と  
 した。お月さまからみると冷たい風が吹  
 いてきて体にあつ／＼かゝる。私の体は白や  
 とする。いかにも秋の味を感ずる。  
 室には月がけつ／＼と河へ渡つて居る。  
 物干とどろ／＼唱歌を歌ひ出す。  
 夏は暑い位だから今はもう之は

高一綴方

支廳に入つて

高木 雲代子

お天氣の大変よ、月に、前々家の  
 文子さんにさそわれで支廳に  
 ワニを見に行きました。

門を入ると一面青々としたビロ

どの様な芝生でした。東京の運

動会の時と野の芝生に入ると此れ

た事など思ひ出したから内門に入ると

そこには櫻の様な形の氷色をした花や

花びらの大きな真紅の花や、フリーム色

にすこしオレンジ色をおびた花が目も

さめる様に咲きほこつて居ました。



に寒いんだ。雨が去つた夏を思ひ  
 出す。手や足はさか／＼と冷たい。  
 物干に居る風を引くと大変下  
 下りて来た。

運動會

大友 たつ子

運動會が近付いた。今夜の運動會  
 一番楽しい朝早く起す空を  
 天気が嬉し。夜庭には薄曇りの  
 つて居る。音楽をする所や  
 立派だ。愈々鐘がなる。皆口  
 マジで体操を終ると私等、  
 と私は直にお揃いの服を着て行く  
 さ、次はどんなであらう。(後略)

少し進むと今度は緑の林のやうに色  
 々の木が植へてあつてその間から黄  
 色の屋根の白い家の様なのが見えま  
 した。そこはテニスコートになつて居  
 ました。まるでおとぎ話の中に入つて  
 来た様な美しさです。ワニの居る所  
 は沢山の落葉でワニは見えません。  
 何だか荒野に来たやうで今にもワニ  
 が出て来さうでした。よく見ると寝て  
 ろう様なやうで帰つて来ました。  
 外へ出ると夢を見てゐた様な気が致し  
 ました。

今日の日本 赤井三郎

今日の日本は危機にあるのです。日本は国際聯盟を脱退した、聯盟の國々から南洋諸島をかへせと言ふであらう。其の時日本は断じてかへさないかである。返へる必要はないのである。南洋は日本の海の生命線である程大切な所である。又日本は貿易も大変盛人になつた。人造絹糸は世界第一だと言はれてゐる。我が國は印度と大へん取引が盛である。日本は印度から綿を買ふ。綿織物を印度に賣つてゐるのである。

高の作文

吾が好める偉人を論ず

石井義晴

僕はナポレオンが好きだ。ナポレオンは西暦一七六九年地中海エジプトに生れた。幼い時から負けず嫌いで、或る時又ナポレオンに向つてナポレオンも前は敗軍になつたと云つた。兵隊の心を居た時の話である。ナポレオンは「お前敗軍になつた」といふ絶對に敗軍にならなかつたのである。ナポレオンは兵隊になつた幼時からいふ言つて居た。それで母が兵隊になつたと言つた時は、那軍に参入したてである。ナポレオンが若し世界を一度におへて王にならうとしない、少くも領土を収めて彼を外國をもへて行けば確に世界が王となつたかも知れない。

イギリス本國から賣出した綿織物は日本のより高いので印度人は安い日本品を買ふ。その為イギリスの賣物に税を沢山かけて自分等の品物を賣らうとしてゐる。日本は又他に賣る道を探さなければならぬ。

危機迫る太平洋 赤代春

今や世界列國の眼は太平洋上にこきれである。否、恐ろしい大砲の口です。それが日本をめぐしての口です。名は太平洋だが、恐ろしい波が巻起るでせう。それから三三年だ。危機は目前に太平洋波高し。

吾が得る希望

持丸 豊次郎

僕が得る希望は軍人である。海軍、少くも航空兵、技術部に志願する積りである。吾が國は四面海に圍まれて居る。陸から攻めて来る敵は殆どな位で、只ロシアと支那があるばかりである。海から攻めて来る敵は澤山あるのである。例を挙げると米、英、伊等の強國が好機はないかと吾國をにらんで居るのである。其の敵を防ぐには海軍が必用である。又敵は飛行機を何千台と云ふ程持つて居るのである。其を防には空軍が必要である。其の空軍はなくてはならぬ飛行機を造らうか、僕の希望である。僕、此の希望に対して、人を賞格を持つて居る。ふかとなき事、たゞ東京に行く、試験を受ける。



にはまだ年が三つ足りないから、寿公の遺言にこそ試験を受ける積りである。

吾が将来の希望 へよりイセトホレー

私は自轉車屋が好きです。それは仕事が好きで、簡便で、これは小な折かあつたりすぐ直せよう、又どこかへ用事で行く時は水に乗る、早くに折れさから私は自轉車屋が好きと思ふます。さういふ覚悟は、三人弟子を産んで、その弟子達に自轉車をさして、私自勤屋の自轉車になら、覚悟です、又金の儲けのつた、色々の商賣をして、親達を助けたりと思ふます。

吾が好み、借人を論ず 磯崎幸春

野口英世を僕は尊敬する。

馬と友の絆

雨

今日もまた雨が、もう雨はいいのにと家ではいふ。今年はずんて雨の多い年だらう。島の真中に水が流れて折角時きつけた菜がみんな流される。あ、もう雨はいやだ。

川の水は、ごうりと流れながその水も此の頃ではきれいと澄んでゐる。一、さきり降った雨が小やみとなると、学校に行くのは今の半だ、蟬も鳴きだした、青空も見えて来た、もうやむだらうと出掛けようとする。

彼は東北の片岡会、播磨代、湖畔の貧家に育つた。不具の子が世界の感激を要求する資格ありとまで云せし彼。半面には、これ程の苦心があつたか、今やい。さて彼は研究、為、アメリカに渡つて一生を終へたか、頭に英世の事跡は努力の歴史であつた。彼の天才とは、夫を立て、刻苦勉勵、たかひである。これほど研究の犠牲となつて一生を終へた事を僕は好む。

二、三、四年、今、は幾日續くだらう、ほんとうたりやになつてしまふ。

一年 峯元おきこ

運動會

暑いと思つた夏もいつか過ぎ、涼しい秋となつた。運動會も近づいた。運動會、この三文字に私達の心は躍る。今ダンスの練習を盛んにしてゐます。運動會のある朝の歌、終りの綱引、六手洋を歌ひながら校庭を廻る嬉しさが眼の前に現れ、水が来ます。

二年 浅沼 雪子

蚊

あつー痛い。思はず叫んで無中で  
掻きながら忙しく振り返つた眼に  
悠然と一匹の蚊の飛び去るのが見え  
た。あの蚊だにくらいーい。私はめき、  
足してその蚊を追つた。け水とも見  
失つてしまつた。どこに行つたらう  
と思つてゐると耳の側でブーンと  
聞えた。ここだとバツと手で打  
つと手はいまづらにはほた大きくな  
まじをたてたばかりで蚊はすうり  
と手をぬけてしまつた。いまづらーい  
と思ひながら又見ると壁の方に行

つた。私は又追つた、かとり  
見失つてしまつた

二年 田中フジ

秋の詩の一節

夏賑いー海辺に

今は人影 くれくれと

唯水一人たづめば

静に淋し秋の夕

二年 山崎春子

俳句

雨晴水て鳥鳴泳げり池水

朝寒や葉の小山の渾りぬれ

(小笠原ちか子見送れぬ句)

二年 浅沼 恵

故 田尻先生を憶ふ(藤川生)

私は田尻先生と同じく豊島師範の  
出身であるため先生の事について  
少しばかり書いて見たいと思へ  
ます。先生は文正丁三年三月に  
豊島小學校を卒業して同年  
四月本校即ち豊島師範へ入學  
したのであつた。入學當初は  
可成りせいも体くオビの方でした  
可論私より少し小さかつたのです  
此皆さんの顔にはまだはつきり残つて

居るでせう。あのオビくして羨望な  
田尻先生の死が

九月十日になると音楽會日や運動

會が開かれる。見物人々、驚きに来る

人々から若き音楽家として將來を

目された。先生は小學校時代から

音楽が好きだつた。師範入學後、豊島

の校課後ニとると音楽教室に關し

こまつてゐる事があつた。音楽が好

きでたまひなり前より何かにかまへては

せぬを音楽化さすと考へてゐた。

いつか本校に開かれた母校の音楽會に於て

パイオリンの独奏をやつたことがある。其時

の由目々先生得意のものかあるたが  
 その傍妙々牛の働き身々の働き一貫  
 に素人には真似が出来なかつた。然し  
 この風は音楽ばかりやしてゐたかとい  
 はないと云うのではない。或時にはラゲ  
 ーやリコーンやホルンやを吹奏する  
 もやうに實に高能といつてもよい位  
 下度昭和四年の四月から七月迄寄  
 宿舎には同室で席がお隣りであ  
 った。だから先生が一日一日の生活をよく  
 知つてゐる。先生は寄宿舎に居る  
 時から上縁坊だった。然し時向下  
 きたり女一人と起された。先生は滑稽

を真似した。あつたスリした白い齒を  
 出して人々笑はせることばかりしてゐた。  
 運々先生を困らせた。五年にわたつた時  
 かり通學を始めた。食物が羨つたか下  
 少し腸を痛めたが大したことはないか  
 った。先生は話によると小笠原は大へんよ  
 い所だと思つたら、笑つて喜ぶであつた  
 をせうか。先生は兄二人も既に死なれた  
 行つてゐた。先生は悲しみを捧げるのは  
 勿論であるが、死した父の心中を察して  
 餘り涙をこして居られた。先生は三  
 生前の先生の心腹に報わんとせば先生の三  
 素の教訓を守らねばならぬ。 (泣く)

學校日誌より

十月十日 上野先生をお迎へ

尋ニ受持

寄贈

一會 参拾圓也 小松薫 敬

息女梅子殿 香英返禮に代へ

右談上を以て厚く即禮申上げます。